安永武人著『戦時下の作家と作品』

有馬輝臣

安永武人先生に御交際を願えるようになったのは、私が同志社大学に転任して二年目の昭和五十二年のことであったと思う。松ケ崎のカンポールのコートで、先生にテニスを教えて頂いたときに始まる。

テニスを通じて七年間も先生に接していながら、専門分野のお話を伺うことはなかった。漱石や鷗外や白樺派あたりの作品は、一度は読んだことがあっても、先生の御専門分野に全然通じていない不勉強の私は、優しい中にも厳しさのある先生に、とてもお話を伺う勇気を持っていなかったのである。私にとって先生は、常に厳父のような存在であった。そして、今年（五十九年）の一月に、先生から『戦時下の作家と作品』を贈って頂き、先生の御著書を少しでも理解したく、この本に扱われている主な作品の中で、入手可能な小説を読みながら、御著書を拝読させて頂いた。そして、今更ながら、お傍にいた時に、もっと先生の学識に触れておけばよかったと後悔している。

私が読んだのは、先生が扱っておられる多くの作品の中で、わずかに、『麦と兵隊』、『生きてゐる兵隊』、『青年』、『生活の探求』、『大日向村』、『旅愁』の六篇にしか過ぎず、しかもそれぞれ流し読みで、作品の理解はおろか、先生の長年に亘る御研究の深遠な思想の片鱗さえ把握できていないに拘らず、このような文を纒めなければならない羽目になり、本人が困っているばかりか、先生にも申訳ないと思っている次第である。門外漢の見当外れな意見として御寛恕を願う次第である。

『戦時下の作家と作品』は、昭和十二年の日中戦争の前夜から太平洋戦争にいたる日本帝国主義の時代に活躍した作家たちが、いかに国体に踊らされ、文学者としての自己を失い、誤った道を歩んだかを詳細に分析し、文学における戦争責任を糾明した、いわば弾劾書であると言えよう。先生は、天皇制ファシズムのもとに、中国や朝鮮をはじめとして、東南アジアに侵略を試みた当時の日本の政策に対して、作家としていかに良心的に文学の中で戦ったかを、文学者の資格として設定しておられるのである。つまり、人道主義の立場から、「文学にとって不

可欠の要件である人間解放の志向」（一〇九）が作品の中で、いかに誠実に追求されているか否かを問うておられるのである。そして、俎上にのぼった作家の中で、先生の厳しい断罪を免れた作家は、石川達三ただ一人であった。それは、『生きてゐる兵隊』が、あの「非文学」の時代にあって、火野葦平の『麦と兵隊』のように、従軍記者の単なる写実的な戦争の記録や戦争風俗小説にとどまらず、「あるがまゝの戦争の姿を知らせることによって、勝利に傲った銃後の人々に大きな反省を求め」、「戦場における人間の在り方、兵隊の人間として生きて在る姿（非人間化）」（四三）を描こうとした「文学」の名に真に値する作品であったからである。

過去の誤った作品評を反駁しながら、この石川の作品分析を進める先生の筆致には、読者を思わず興奮させずにはおかない気魄がみちており、本書の中でも白眉の作品論であろう。特にインテリ出身兵士の崩壊過程の克明な分析には、当時の先生自身への厳しい自己批判を含んでいるような気がしてならないのである。文芸批評のよしあしは、作品の正確な理解はもとより、批評家自身がいかに厳しく自己の内面を見つめているかによっても決まるものであろう。先生の達三論が、そうした仮借のない自己分析に裏打ちされたものであるがゆえに、鬼気に迫るとともに、説得力をも持っているのではないだろうか。本著における先生の言い分は、この石川達三論に集約されていると言っても過言ではあるまい。

林房雄の『青年』は、林のマルクス主義からの離脱（転向）のいわば自己弁明になっているとともに、皇国史観を信奉するにいたる第一段階であり、彼の「日本への回帰」を意味する作品であったと、その隠された動機を明らかにし、文学としては、明治維新という激動期における伊藤博文や井上馨らの人間群像をとらえながらも、「人間解放の志向を放棄」していることに、この作品の失敗と、作家としての限界を見、その「人間解放の志向の放棄」が、結局は林房雄をして、戦争の非人間性から眼をそらさせたとして、林の文学者失格を厳しく宣しておられるのである。

島木健作の場合も、活動の上で「転向」しても、思想の上では「非転向」を貫いた彼の真摯な生きざまに好意を寄せながらも、島木自身の自己再建が、「自己救済に重点がかかりすぎたために、日本の現実を自己の対決の対象として文学のなかにとりこむのではなく、たんなる背景として遠ざけ」（一五八）て

しまっているとして、島木の「たたかいの放棄」を指摘しておられる。

日本文学の素人にとって恐らく一番馴染みの薄い和田伝は、長野県南佐久郡大日向村に起った実話に基づいた『大日向村』を小説化することによって、農村の次・三男問題の解決のために、天皇制農本主義に基づく大陸移民という侵略政策を無批判に、かつ積極的に肯定したとして、林房雄とともに、厳しい非難の対象になっている。

横光利一の『旅愁』の場合は、折角、東洋と西洋の文化的特質の対立という日本文学にあっては新しいテーマを描こうとしながらも、東と西の文化の「交流を不能とする拒絶の意識と自国文化の優秀性強調の姿勢のみが露骨」(二一四)に現われ、何も解決されないまま、伊勢神宮によって代表される日本の「古神道」にすべての解決策を求めた横光の「現実放棄」を見逃さないのである。

先に、石川達三の『生きてゐる兵隊』論が本書の白眉だと評したが、巻末の第Ⅲ部に置かれた「植民地の文学」も、強い感動なしには読めない朝鮮作家たちの「たたかい」の紹介であった。本書が、いわば日本の戦争責任を問う弾劾書であるからには、その悪政のもとに呻吟しなければならなかった朝鮮の人たちの苦悩を、朝鮮の作家の作品を通じて紹介することによって、日本民族が犯した過去の罪への謝罪となし、本書のしめくくりとしておられるのである。この部分は先生の日本人としての贖罪の一つの試みでもあろう。ここで先生は、韓雪野、李泰俊、金史良をはじめとする朝鮮の作家たちが、日本の多くの戦時下の作家たちとは異なって、厳しい検閲と弾圧を潜りながら、いかに「人間解放」の闘争を志し成就したかを美しく例証しておられる。朝鮮文学に日頃接することのない者にとって、この第Ⅲ部は、恰好の入門書であり、解説書であろう。この第Ⅲ部に、安永先生のヒューマニストとしての面目が躍如としている。

ただ、兵士として戦争に加わったことはなく、戦時中にいたいけない子供として戦火の中を逃げ惑った世代の者や、いわゆる戦争を知らない子供たちは、先生が扱っておられる各作品をどのように読むだろうかと考えるのも無駄ではないであろう。確に、火野葦平の『麦と兵隊』の中で、「眼前に仇敵として殺戮し合っている敵の兵隊が、どうも我々とよく似ていて、隣人のような感がある、ということは、一寸厭な気持である。それは勿論充分憎むべき理由があると思いながら、この困ったよう

な厭な気持を私は常に味わって来たのである。私は先日王西庄で綿々たる恋文を懐中しておったAによく似た雷国東を思い出し、既に観念しているこの四人の捕虜を長く見ている気がしなかった」（新潮文庫、一六三）などの文章を読んでいると、なぜその類似から同胞意識が生まれて、戦争の愚かさに思い到らないのかと歯痒く感じもし、『大日向村』の無批判な大陸移民政策の讃歌の中に、政治に流され易い利己的な国粋主義の恐ろしさを感じもするが、他方では、戦時下にあって、感受性にすぐれた文学者たちが、どのように感じ、どのように行動し、現実をどのように把握し記録していったか、たとえ、彼らの思想や態度や行動が間違ったものであったとしても、彼らの眼にいかに映ったかを知るだけで、満足する読者もいるであろうと考えるのである。戦時下の作家たちも彼らなりに真剣に生きたであろうだけに、彼らの遺した「非文学」も、先生のように厳しい文学の基準を持たぬ読者には、「文学」として興味の対象になるのではないかとも思うのである。

送別会の席で、先生はこの著書の続篇を御執筆中と伺ったが、一日も早く上梓されることを心待ちにするとともに、益々の御健勝を祈ってやまない次第である。

なお、伊東静雄の『春のいそぎ』は入手できなかったため、この項の言及は控えさせて頂いたことをお断りしておきたい。

未来社刊・昭和五八年一二月二三日発行
B6判、三四五頁　二五〇〇円

戦時下の作家と作品　目次

Ⅰ　戦場の記録と文学
火野葦平『麦と兵隊』
石川達三『生きてゐる兵隊』
Ⅱ　文学の転向
はじめに
林　房雄『青年』
島木健作『生活の探求』
和田　伝『大日向村』
横光利一『旅愁』
伊東静雄『春のいそぎ』
Ⅲ　植民地の文学
―「皇民化」とたたかう朝鮮の作家たち―
あとがき